第104回 二科展

NIKA

104TH NIKA ART EXHIBITION

被災地児童・生徒作品特別展示

なみえ創成小・中学校キッズゲルニカ ー世界の空へー

福島県双葉郡浪江町立なみえ創成小学校・なみえ創成中学校

会場：国 立 新 美 術 館
会期：2019年9月4日～9月16日

「浪江町の復興に向けて」

福島県浪江町長　吉田 数博

浪江町では、平成23年3月の東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故により、いまだに多くの町民が、町外で生活を送っております。このような中、令和元年度4月末に浪江町内の住民が1,000人を越え、少しずつではありますが浪江町の復興が進んでいると感じております。これは一重に、浪江町の復興に思いを寄せる皆さまからの温かいご支援のおかげであり、改めて深く感謝を申し上げます。

このたび、公益社団法人二科会の皆さまより、平成30年4月に開校した「なみえ創成小学校・なみえ創成中学校」において、国際プロジェクトコラボ「キッズゲルニカ」でのご支援をいただき、絵画作成を通して子供たちが貴重な経験をさせていただきました。

今回、子供たちが描いた「鯉」、「富士山」は、子供たちの明るい未来を彷彿とさせるものでありました。また、浪江町としても復興の取組みを続ける中で、子供たちから町の未来に大きな希望をいただいたと感じています。

最後に、このような素晴らしい機会を与えていただいた、公益社団法人二科会の皆さまに心より感謝を申し上げるとともに、浪江町の復興と浪江町の子供たちの今後をお見守りくださいますようお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

「なみえっ子の明るい未来へ」

福島県浪江町教育委員会教育長　笠井 淳一

このたび、公益社団法人二科会の皆さまより「絵画作品制作を通して、子供たちが表現や共同作業の楽しさを味わい、世界の子供たちと交流していくことを願って」の絵画作成のご支援をいただき誠にありがとうございます。

「なみえ創成小学校・なみえ創成中学校」は、平成30年4月に開校した小中併設の新しい学校であり、全校の児童生徒16人の極小規模の学校であります。しかしながら、この16人が力を結集して大きな絵画作品が出来上がったもので、子供たちの夢や希望が満ち溢れているものとなりました。

同校の校章は、浪江町の鳥のカモメと地球が描かれており、これは子供たちの将来への飛躍と国際的な活躍を願ったものであります。今回のプロジェクトコラボ「キッズゲルニカ」において絵画作品を通じて、世界の子供たちと交流していくことにより、校章に表されている将来への飛躍と国際的な飛躍の一部を実現していただいたと感じています。

結びに、浪江町の子供たちに貴重な体験を与えていただきました、公益社団法人二科会の皆さまへ感謝を申し上げます。

福島県双葉郡浪江町立 なみえ創成小・中学校 キッズゲルニカ –世界の空へ–

福島県双葉郡浪江町立なみえ創成中学校長　半杭 千歩
福島県双葉郡浪江町立なみえ創成小学校長　馬場 隆一

この度、二科会の先生のご指導の下、なみえ創成小学校・中学校の子ども達が制作した作品をとおして、世界中の人々に「ふくしま・なみえ」を知っていただく機会とみんなで創りあげる事の大切さを学ぶ機会を与えていただきましてありがとうございます。

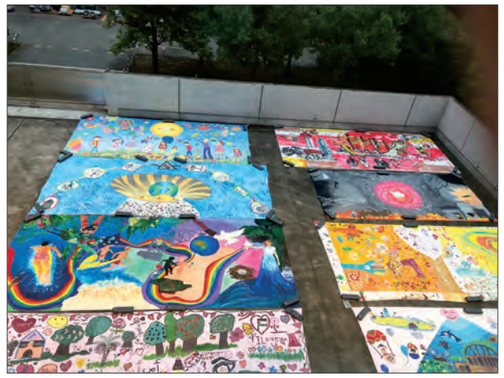
この作品によって、浪江の空が世界中とつながっているようにたくさんの人々と浪江の子ども達との新たな出会いが生まれればと願っております。

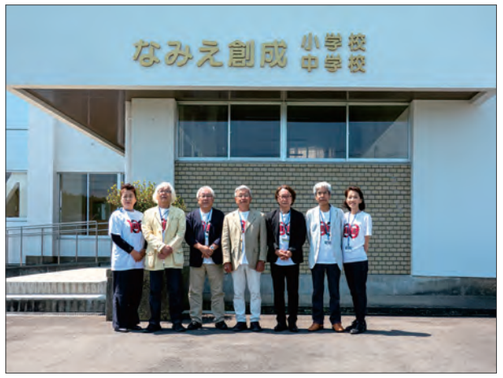
ところで、震災前の浪江町は小学校6校と中学校3校におよそ１７００名の児童・生徒が学び、学校はそれぞれの地域の中核として住民との密接な関係を保ちながら教育活動の充実が図られていました。ところが、２０１１年3月の原発事故による全町避難で地域や学校の状況は一変し、未曾有の大災害による混乱にさらされました。そのような中、浪江町は２０１７年3月末に避難指示の一部解除が行われ、２０１８年4月に浪江町内に町内全域を学区とする、なみえ創成小学校と中学校を新設校として開校しました。

本校は極小規模校ではありますが、世代を超えた交流を図る新たな地域コミュニティの拠点としての使命も担いながら、子ども達の明るい笑顔が帰町した住民や未だ避難生活を送る浪江町の人々に笑顔と希望を与えています。これからも、学校を応援してくださるたくさんの方々と「未来のなみえ」への想いを共有しながら、ここに集う子ども達だからこそ創り出せる「学び」「愉しさ」「安心」で子ども達と地域の未来を切り拓く学校を創りあげていきたいと思います。

最後に、今後とも子どもたちの成長を温かくお見守りくださいますようお願い申し上げ、ごあいさつといたします。

▲なみえのキッズゲルニカ作品の前で記念撮影


▲野外展示会場：世界8カ国のキッズゲルニカ



▲なみえ創成小・中学校前にて 二科会作品制作指導スタッフ

第104回二科展は9月4日のオープニングセレモニーで開幕。台風15号の影響で二日間、野外での展示を退避させるという事態はありましたが、多くの来館者を迎え、無事に終了することができました。
今年はウクライナ作家との交流展示や、外国作家や著名人制作の起き上がりこぼしコラボ展示など、盛りだくさんの国際色豊かな展示となりました。

本年で8回目となった被災地児童の共同制作は、キッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクトの一環として制作された8ヶ国の野外展示作品や、福島県浪江町の子供たちが描いた希望と平和へのメッセージを展示いたしました。4部門（絵画・彫刻・デザイン・写真）の会員によるチャリティーコーナーでは、被災地支援の義援活動や、絵葉書を「絆通信」として活用していただくなど、被災地支援活動を行いました。

なみえ創成小・中学校キッズゲルニカ ー世界の空へー

第104回二科展 被災地児童・生徒作品特別展示

なみえ創成小学校・中学校 制作　キッズゲルニカ作品サイズ：7350㎜×3300㎜／制作期間：2019年6月12日～13日　　参加者　小学生：1年生6人／2年生2人／3年生2人／5年生2人／6年生2人　中学生：2年生1人／3年生1人

〈作品制作指導〉
生方純一・川内　悟・登坂秀雄・山中宣明・中島敏明
須田美紀子・塙　珠世

▼キッズゲルニカ作品制作風景

■先生達からのコメント（順不同）

今泉好子（小学校教務主任 小6年担任）
顔も手も足も絵の具まみれの子どもたちでしたが、目は真剣そのものでした。
色を混ぜたり、塗り方を工夫したり、生き生きとした姿は、とても印象的！みんなの力とみんなの思いを集めた、素敵な絵は必見です！！

稲垣みゆき（小1年担任）
未来に向かって力強く歩んでいけるようにとの心遣いに感謝でいっぱいです。
子ども達は○なかよく○みんなで○えがおいっぱい制作にあたっていました。協力して一つのことを成し遂げる喜びを、存分に味わえたと思います。

早尾俊太朗（2年担任）
日常のしがらみから解き放たれ、全身を使って自由に絵を描くその姿に感動しました。
「ここからは青にしよう。」「いや、緑がいいな。」「それなら･･･」子ども達は達成感だけでなく、他者と共に生きるための大切な何かを学べたのだと思います。

佐藤信一（小3年担任）
広々としたキャンバスに、のびのびと筆を走らせる姿を見て、自分もウキウキした気持ちになりました。
あれほど大きな広さに描くという体験は今後もなかなかない貴重な体験だと思います。

村田希望（小5年担任）
ワクワク、ドキドキ、ぬりぬり、ペタペタ、ニコニコ、完成！！
こどもたちのたくさんの「音」がつまった作品です。少人数でも力を合わせれば、こんなに大きな作品がつくれると気づく事ができました。ぜひ多くの方に見て頂きたいです。

末永佳子（小1年担任）
どんなことをするのかな。わくわく、どきどき。わぁ大きいな。がんばるぞ。絵の具ぺたぺた、ぬりぬり、楽しいな。絵の具まぜまぜ、やりすぎた。あちゃあ。できたよできた。みんなの力はすごいなぁ。子どもの心がよく分かるすてきな活動ありがとう。

半沢恵梨（養護教諭）
「なに色の服を着せようかなぁ」「どんな靴をはかせよう」「どうしょう！うまくできないや･･･」
「ここをこうすれば･･･」一生懸命考えて、膨らませて、描くことができました。
子どもたち一人一人のアイディアがちりばめられた作品です。

吉川信夫（中学校教頭）
明るい未来を信じる子どもたちが、二科会の先生方のご指導をいただき、すばらしい作品を作りました。
大人を信じ、未来に向かって着実に歩みを進める子どもたちの純粋な心が感じられました。

荒木拓志（中学校教務主任）
大きなキャンバスを前に、子どもたちは驚きと期待感でいっぱいでした。教えていただいた手法と自由な色使いで染め上げていく姿は、とても生き生きとしていました。
キッズゲルニカ作品の制作に参加できたことは、豊かな感性を磨く、すばらしい機会になったと思います。

柴口正武（中3年担任）
自由な発想や感覚、ひらめきで、作品がつくられていくことの驚きや楽しさを感じることができました。中学生も偶然性を楽しみながら活動に参加し、笑顔で作品づくりをしていたのが印象的でした。浪江中時代もビーグアート制作を文化祭で行ってきましたが、それとは異なった面白さを味わえたと思います。

佐藤千賀子（中2年担任）
「一学期一番楽しかったのはみんなと絵を描いたこと」と中学二年の生徒は言いました。
自分が絵を描くことを通じて、コミュニケーションをとれたのがとてもうれしかったのでしょう。顔にまで絵の具をつけて真剣に取りくんでいましたから。こういう機会を与えて下さった皆様に大変感謝いたします。

高野英樹（中学校主事）
大自然をモチーフにして力を合わせて描いた大作ように、子どもたちが大きく、美しく成長してほしいと思います。

長階哲哉（中学校進路指導主事）
子供たちは、大きな期待と驚きを胸に、キラキラした瞳で迎えていました。
教えられたやり方と豊かな発想力で、少しずつ染め上げていく様子はとても圧巻でした。
この企画に参加できたことは、子供たちの心に大きな影響を与え、とてもよいチャレンジになったように思います。

白土敏夫（中学校生徒指導主事）
子ども達の可能性は無限大です。いかにその子に力を発揮できる機会を与えてあげられるかです。この度の“キッズゲルニカ”にはその可能性を感じさせるものがたくさんあり、それを皆様と共有できたらうれしいです。

髙萩円馨（栄養技師）
浪江町の希望の光である、なみえ創成小・中学校の子どもたちが心を込めて描いた作品が、世界のみなさんにその想いが伝わることを祈っています。

菅野みどり（小学校主事）
この作品は浪江の子ども達が、それぞれ手をつなぎ、力を合わせがんばっている姿だと思います。
これからの福島の子ども達の未来に希望がありますようにと祈り、見て頂きたいです。

キッズゲルニカ国際子ども平和壁画制作プロジェクトの始まり

第104回二科展 被災地児童・生徒作品特別展示

1992 年、京都を拠点に、画家、染色作家、舞踊家、大学教授、美術教員、博物館・美術館学芸員、芸術・文化に関心のある一般人の構成で芸術、文化の活動及び情報を発信する非営利活動の研究会が発足しました。1995 年、第二次世界大戦終結 50 年に「平和」をテーとした絵画制作が考えられました。1994 年は、国連で採択された「子どもの権利条約」を日本が批准、発効した年であったことから「子ども」が主役で、世界の子どもが描くことを考えました。そこで「ゲルニカ」と同じ大きさのサイズのキャンバスに描くことにしました。

スペインのピカソが 1937 年に、スペイン市民戦争のときに起きた市民、子どもが犠牲になった空爆の残忍さに抗議して、「ゲルニカ」の壁画作品を制作しました。壁画は通常、壁に描かれます。壁には「隔たり」の意味があります。「ゲルニカ」はキャンバスの上に描かれているので、パリからロンドン、ニューヨーク、そしてマドリッドへと運ぶことが可能になりました。キッズゲルニカの平和壁画も持ち運びが可能なキャンバスに描かれています。この移動可能な壁画というものは「隔たり」を取り除くということを象徴しています。世界の平和というものは、国家・人種・宗教・文化そして人々の間の「隔たり」をなくすところから始まります。

「キッズゲルニカ」の基本理念は、ピカソの制作した「ゲルニカ」と同じサイズ (3.5m×7.8m) の絵に、子どもたちが平和のメッセージを込めて、描くというもので、それ以外には、技法、内容、制作期間に関しては何もありません。

キッズゲルニカは、地球全体をキャンバスにして平和の精神を表現し、人々をつなげていくアートです。すでに 50 カ国で 250 点以上の素晴らしい平和の絵が制作され、今も生まれています。

キッズゲルニカ国際委員会代表、大妻女子大学教授　金田卓也

1995 年アメリカ・フロリダ州立大学で最初のワークショップが始まり、日本国内、韓国、フランス、ドイツ、パプアニューギニア、インド、クェートなどで制作した作品は、各国で展覧会を行ってきました。2000 年 12 月ネパール・カトマンズでのワークショップ、展覧会後、研究会から各国の指導者によるキッズゲルニカ国際委員会によるキッズゲルニカ第２期のプロジェクトが始まりました。

1999 年に制作された広島作品は、ネパール・カトマンズからイタリア・クロンプラッツ展（2001-2002）のアルプスのスキー場で展示され、2012 年スペイン・ゲルニカのゲルニカ平和美術館で保存、展示されてきました。広島、長崎では毎年、原爆慰霊の日に展覧会開催を続けています。2016 年、日本に戻ってきた広島作品は、京都で展示され、忘れられた過去の作品が 18 年後に、また広島で展示されました。

まだ戻ってきていないキッズゲルニカに京都の養護学校の子どもたちが描いた作品 (1998) があります。身体的、心的ストレス、脳性麻痺など様々なハンディキャップを持つ子どもたちは、最初はまずはボディペインティングでキャンバスの上に絵の具を伸ばし拡げ、それぞれ思いつくものを描いて行きました。上書きで、前に描いた絵が消えることもありますが、抽象絵画風の作品が完成しました。遊びと作品制作、参加する楽しさ、喜びを享受できるワークショップとなっています。また沖縄の作品 (2000) はダリの絵の少女のように地面を持ち上げると戦闘機の並ぶ過去が描かれています。

インド・コルカタ市 (2007,2011) では、目の見えない子どもたちが端切れを使って、布の切り絵のキッズゲルニカを制作しました。少し目の見える子どもは、目に近づけて色と形を確認しながらハサミを使って布を切り、画板の上で他の布と大きさ、位置関係をチェック、キャンバスに糊付けします。全盲の子どもは、見える子に手伝ってもらい、自分で切った布と形を確認して制作した作品は、黒のキャンバスに、馬、ラクダ、象、鳥の生き物、手をあげる子どもと大人、果物や色々な葉のある木々、インドの国旗、他の国の国旗が描かれ、落ちついた色合いのあるメルヘンな作品が完成しました。

この「文化のイクオリティ（平等性）」と「ノーマライゼイション（等性化）」の実践は、最初のフロリダ州立大学のワークショップから始まっています。キッズゲルニカは、絵を通した異文化理解、相互の尊重、思いやり、共存、協力と平和を目的としています。キッズゲルニカ・プロジェクトは、色々なところとコラボレーションをしています。その一つが「起き上がりこぼし」プロジェクトがあり、その繋がりによって今回の二科展の展示となりました。一緒に展示する機会を作っていただいたことに感謝しています。

花中舎伊藤組 CEO、元・大手前大学メディア・芸術学部教授 キッズゲルニカ提案メンバー　水口　薫

▲1999年制作　広島市・中島小学校

▲2018年制作　パリ市 ビニョン校

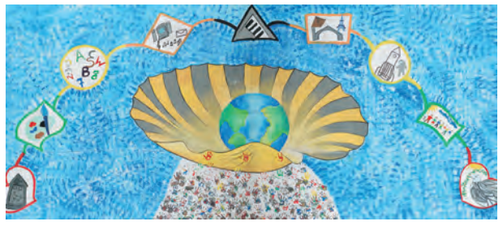
▲2015年制作　ベルギー ブリュッセル　トゥッティ・フルッティー（幼い子どものための語学学校）

▲2007年制作　シドニー ポート・ハッキング高校

▲2017年制作　ウクライナ スラブチチ市の子ども達

▲2004年制作　上海市香山小学校

▲2017年制作　イスラエル ガザ地区



▲2001年制作　ボスニアヘルツェゴビナ・サラエボ

福島県双葉郡浪江町立なみえ創成小・中学校キッズゲルニカ –世界の空へ–

スペインの画家、パブロ・ピカソが反戦の思いを込めて描いた名作「ゲルニカ」にちなんで、同作品と同じサイズの大作を世界の子供たちに「夢や希望」をテーマに自由に表現してもらおうというのが、国際プロジェクトコラボ「キッツゲルニカ」の趣旨です。

今回は公益社団法人二科会の「キッツゲルニカ制作委員会」と福島県浪江町の協力で「なみえ創成小・中学校」の全校生徒１６名と先生方のご協力で「なみえ創成小・中学校キッズゲルニカ –世界の空へ–」を制作いたしました。

制作は同校の広い体育館を使い、２日間で描き上げました。この作品が海外へも貸し出されることも考慮し、日本を象徴する富士山と、大らかに空を泳ぐ鯉のぼり、それを引き上げる１６名の生徒達の伸び伸びとした姿を描くことが出来ました。

作品は第１０４回二科展の会場である東京・六本木の国立新美術館に展示され、多くの人にご覧いただきました。豊かな気持ちになっていただければ幸いです。

公益社団法人二科会 常務理事　生方純一

第104回 二科展 被災地児童・生徒作品特別展示

二科会作品制作指導
生方純一・登坂秀雄・川内　悟・山中宣明
中島敏明・須田美紀子・塙　珠世

公益社団法人　二科会

〒160-0022　東京都新宿区新宿 4-3-15
レイフラット新宿 501 号室
TEL.03-3354-6646　FAX.03-3354-4768
メールアドレス　nika@nika.or.jp
公式ホームページ　https://www.nika.or.jp

制作：アルテス・クリエイト